

海馬の心理学的機能 の研究―空間認知と場 所学習―

岡市広成著 (大学文学部教授)



ソフィア
4,855円

われわれの頭の中に海に生きる生物がいる。龍のおとし子、「海馬」である。海馬は発生学的に古い組織で、非常に大きな組織でもある。形はバナナに似ており、どこで切っても金太郎飴のように同じ形の模様が見られ、入出力が明確であるという特徴を持つ。近年の脳の高次機能に関する研究の進歩は様々な心理学的諸現象を神経科学的に説明することを可能にしてくれた。このような流れの中で海馬は空間認知、作業記憶を司る部位として脚光を浴びている。岡市広成著の『海馬の心理学的機能

能の研究―空間認知と場所学習―は、こうした脳の研究の一翼を担うものである。著者は海馬研究の第一人者であり、十数年前から海馬研究会を主宰し、先日五十回大会を迎えている。

本著は、解剖学的手法を用いながらも心理学プロパーとして、認知行動学的立場を堅持しながら行ってきた著者の永年の研究をまとめたものである。著者は、海馬の認知地図仮説、海馬の解剖学的解説に続き、これまで内外の学会誌に公表してきた場所学習に関する論文を中心に海馬の心理学的機能について論究している。本著は一般向けの啓蒙の書を目指したのではなく、内容はかなり高度で、最新の内容から成っており、日本のそして世界の海馬の機能研究にとって重要な位置を占めるものである。また海馬以外の脳機能研究にとっても有意義な知識、示唆を与えてくれる。

鈴木直人 (大学文学部教授)

Business Communication toward Transnationalism

亀田尚己著 (大学商学部教授)



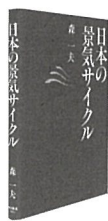
近代文芸社 2,500円

亀田尚己教授の右の著書は、ビジネス・コミュニケーション分野における日本人による最初のもたとった英文著作である。同書は長年にわたる教授の実務経験に裏付けられた研究の成果であって、同書が教授の所属する米国のビジネス・コミュニケーション学会より一九九七年一月、前年に出た優れた出版物として賞が贈られたことは大慶至極である。聞くところによれば、同学会の外国人メンバーが受賞したのは教授が初めてだという。

同書は次の十章からなる。①海外駐在日本人マネジャーの諸問題、②アジアの共通語としての英語、③地球規模の取引手段として用いられる様々な英語、④ビジネス英語の過去と未来、⑤異文化間における事実の伝え方、⑥管理者層コミュニケーションにおける意味の取り違え、⑦異文化間における認識と事実の問題、⑧企業ベースのコミュニケーション・マネジメント、⑨ビジネス・コミュニケーションにおける意識問題、⑩異国間コミュニケーションにおける共通問題。

同書では、エッセンスとして異文化間、特に非英語国民同士の取引において、英語を介していかに相手方の共感 (empathy) を得ることが大切であるかが説かれている。平易な英語で書かれた共感措く能わざる好著である。

中村 弘 (大学商学部教授)



東洋経済新報社
3,000円

日本の景気サイクル

森一夫著 (大学経済学部教授)

本書は、第二次大戦後の五十年間の日本経済における景気循環の推移をできるかぎりの景気データを使い本格的に分析・説明する」ことを目的として書かれたものであり、著者のこの分野の長年の研究が集大成されたものである。学問的水準を低めることなく、やさしく理解しやすい表現を用いるように工夫しており、右肩上がりの経済が終わり、景気の低迷の中にある現在の日本経済を知る上でも時宜を得た好著である。

内容は、序章から始まり全九章および終章から構成されている。序章では過去五十年の世界の景気指標研究の歴史の紹介が

あり、この分野の研究の発展を知ることができる。第一章から第五章までは、景気循環に大きな影響を与える在庫投資、設備投資、消費支出、マネーサプライと金利、輸出がそれぞれの章で取り上げられ、一九五五年以降のデータと第二次大戦後の景気基準日付が比較され、それぞれのサイクルの性格が明らかにされている。第六章から第九章までは、デフュージョン・インデックスやコンボジット・インデックスの景気指標を中心とした景気基準日付の設定の説明とともに、景気循環の継続期間や量感の問題が取り上げられている。

本書は、景気循環の解説と研究書であるばかりでなく、終章でもまとめられているように、高度成長期の景気循環と安定成長期の景気循環の違いを数量的に明らかにした、優れた日本経済論の本としての価値を持っている。二村重博(大学商学部教授)



三和書房 1,900円

ライフル射撃の運動学

星名 倫著
(大学経済学部教授)

本書はタイトルの通りライフルの初心、中堅の射手を対象とした手引書である。しかし、その内容は単なるノウハウものではない。本書の特徴は、大まかに三点あると筆者は考える。

一つめは、ライフル射撃をまさに運動として捉えているところに著者の研究者としての、またライフル射撃の指導者としての真骨頂が窺える。門外漢である筆者の印象では、射撃・アーチエリー・弓道などの動きの少ないスポーツにおいて、当事者たちが競技力向上を話題にする場合、如何なるフォームを作り上

げるか、また何時撃つかというテーマに終始することが多い。つまり、運動能力について関心がないかのような印象を受けることが多いのである。著者いわく、「運動能力を備える者のみが静止のカッ字の理論に耐えられる」という考えを基に、初心者には競技段階へのステップとしてからだづくりから入ることになる。

二つめの特徴である運動学を軸にしていることから他種目の者が読んでも非常に参考になり、三つめの特徴である解りやすい言葉での説明がなされていることと相まって、バスケットボールに関わる筆者も一氣に読み進んだ、卓越した指導書である。

富居 富(大学工学部教授)



地歴社 1,800円

オウム真理教事件を哲学する

―高校倫理教育の現場から―
大塚賢司著
(高等学校教師)

この書は他とは異なった視点と方法で、オウム真理教が巻き起こした事件を見据え、核心に迫っている。

まず、事件を日常的には起こり得ない事象とは捉えず、若者達が心理的欲求から惹かれていく「超能力」等を哲学する方向で、「授業」という著者の実践現場で、生徒自らの動作と討論を通して、これを扱っている。

次に、事件を十分に学び得る素材として冷静に取り扱い、それとの関連で「合理性」「個人主義」「日本的集団主義」へと展開し、若者達にとって現在の日本

がいかに魅力のない国であるか、これ迄の教育制度が人間形成に有用であったか否か等を検証している点である。

授業時間数という制限内で、教師の視点や思想を押し付けず、生徒自身の感性や知性等を十分に刺激し、道を誤まらず切り開いて行くという「授業」をされている事に敬意を表したい。正に、生きた哲学としての「実践哲学」が為されており、臨床心理面接に於いても有用な示唆を受けたと感じる。

ただ、枝葉末節であるが、これ迄の哲学授業全体を凝縮した形で盛り込んだ為に、紙面が窮屈で、授業程の余裕が感じられず、どこことなく息を詰めて読まねばならなかったのは残念で、内容の素晴らしいが伝わる前に、読者が書を閉じないかと心配する次第である。

坂本雅紀(近江臨床心理研究所長)



柏書房 19,000円

ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅(上下)

ラウル・ヒルバーク著
望田幸男(大学文学部教授)ほか訳

ホロコーストの研究書だけで、すでに二千冊に達すると言われる。『アンネの日記』のような日記・体験記をはじめ『シンドラのリスト』などのノンフィクションを加えれば、汗牛充棟は誇張ではない。だが、ヒルバークの本書こそ、ホロコーストに関する包括的で最高の権威をもった古典である。この記念碑的な大著の翻訳自体が、我が国の現代史研究において画期的な事件ですらある。

しかも、原著は出版から今日まで三十年以上にわたり、激しい論争の渦中に座り続けてきた。特に、ホロコーストの全体

像を描き出すためには不可欠であった「ユダヤ人が自分たちの絶滅過程で果たした役割」(下巻二六九頁以下)の記述をめぐって、彼自身ユダヤ人であるヒルバークは、「研究のタブー」に触れた歴史家としてユダヤ人共同体から猛烈な非難を加えられてきた。

また、最近のドイツ史研究では、ホロコーストは単なる人種差別から生じた非合理的な出来事ではなく科学的・官僚的な計画合理性の帰結とする立場が有力である。そうした新しい視点から、本書は現代システム社会の批判として読むこともできる。ヒルバーク自身は、こう述べている。「ドイツ人にしかあのようなことはできなかったと考える者は楽観主義者だし、同じ状況におかれれば誰でもあのようなことができるかと考える者は悲観主義者だ」としか、私には言えません」。やはり私は悲観論者か、と実感させられた。

佐藤卓己(大学文学部助教授)



日本基督教団
正雀伝道所

イエスの福音

工藤弘志著

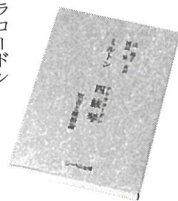
(大学キリスト教文化センター助教授)

「たかが六百字、されど六百字。そうつぶやきながら三十年間」毎週書きつづけられたことにまず脱帽。その鍛練から生みだされた、簡にして要を得たことばによるエッセー集である。単純計算で千五百程の中から選別された文章は、元来教会の週報に書かれたものであるから、読む方は身構えてしまいそうだが、それらしくないところがまた良い。収録された百十二編は、「本のつまみ食い」、「聖書を読む」、「日本人が描いたイエス像」の三つの章に分けられている。そのどれをとっても、教会と大学のキリスト教主義教育の現場で活躍してきた著者のキリスト教に対する姿勢を伺い知るこ

とが出来て興味深い。

第一章の本の紹介は、著者の多彩な読書遍歴を下敷きにしたがら、たとえば、御用文学者を嫌ったのに千円札に刷り込まれてしまった夏目漱石のエピソードから、「そういえば、キリスト教のドグマに刷り込まれて変わり果てたナザレのイエスも似たような運命だったか」と軽妙洒脱なオチをつけるあたり著者の面目躍如というべきか。第三章は他に余り類を見ない日本人の視点からのイエス像である。北村透谷、上田敏、幸徳秋水、芥川龍之介、太宰治、柴田練三郎、筒井康隆等の有名どころを含む多士済々のイエス像を通して、著者の人間イエスへの想いが伝えられてくる。どのエッセーもその本を読んでみたいと思わせる魅力に溢れているのに、本書は教会創立三十周年記念出版ということで市販されていないのが惜しまれる。

宮庄哲夫 (大学文学部教授)



リーベル出版 3,000円

四絃琴

——聖書と離婚論

ミルトン著

辻 裕子 同志社女子大学教授 ほか訳

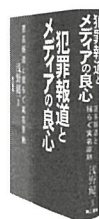
イギリスの詩人ミルトンは一六四二年六月に十七歳も年下の、しかも社会的・宗教的背景を異にする女性と急遽結婚する。結婚生活はうまくゆかず、若妻は二カ月ほどで親元へ帰ってしまう。この体験がミルトンに、結婚とは何か、という課題を提供した。そして発表したのが『離婚の教理と規律』(一六四三年)であった。「結婚は契約であり、その本質はいつわりなき愛と平和のなかにこそある」。それが破られれば、離婚も仕方なし、という理屈であった。

この議論は国教会側からも、(ミルトンの属した)長老派側からも大反発を食らった。

『四絃琴』は、前著(再版も出た)への批判にたいして、おもに「創世記」、「申命記」、「マタイ福音書」、「コリント人への第一の手紙」の四編を資料として用いて——したがって「四絃の琴」と題した——反論したものである。

ミルトンの論理はかんたんなのだが、その文体は難解をもつて鳴るものだ。ふたりの訳者は十年以上の年月をかけて、この訳業を達成された。さすが越智文雄先生の学統を継ぐ方がたである。近代的結婚観の源泉、十七世紀の神学議論や自然法ロジックの適応の仕方の実際を知るためにも不可欠な歴史的文献が、ここに平易で、内容も正確な日本語に移されたのである。

新井 明 (日本女子大学教授)



第三書館 2,600円

犯罪報道とメディアの良心

浅野健一著

(大学文学部教授)

“For Decent Journalism”
それは、権力に対しては懐疑的姿勢を失わず、マイノリティにはやさしさを忘れない品格、そして責任あるジャーナリズムの実現を願う行動する著者が、本にサインを求められた時に記す言葉である(二六九頁)。

一九九七年、著者は大学組合の委員長として多忙な一年を過ごした。しかし、この間も、その熱い思いは衰えることを知らず、六冊の本を刊行された。本書はその一冊であると同時に、『犯罪報道』の再犯『オウム』破

防法」とマスメディア』に続くものであり、匿名報道主義三冊の完結編という位置づけで、編集したものであるという。ペルー大使公邸内取材に係る論争をプロローグとし、全部でⅢ部八章構成となっている。

匿名報道主義への批判の誤りを明確に論証する第一章、みどり荘事件などを素材に実名報道の罪と罰を分析する第二章が第Ⅰ部をなす。次いで、第Ⅱ部では、メディア責任制度の確立へ向け、権力による統制ではなくマスコミみずからのあり方として、報道評議会への展望を示している。また、第Ⅲ部は、皇太子妃報道協定、PKO派兵問題、そしてジャカルタ支局長としての体験を踏まえ、アジアにおける日本の有害性を説いている。読者は、著者のほとばしるエネルギーに酔いしれるとともに理想のメディア改革を願わずにいられない。

佐藤鉄男(大学法学部教授)



小沢書店 2,400円

幻想のオイフォーリー ―泉鏡花を起点として 高桑法子著

(女子大学文学部助教授)

〈オイフォーリー〉とはドイツの精神医学用語で、多幸症と訳される言葉だという。幻想文学が

成り立つ「作品行為」という場面において、書き手と読み手がそれぞれに体験する〈無限の陶酔〉の実相を、個別の作品に即して明らかにしようと試みた本書は、示唆に富んだ魅力的な新刊である。「狂乱の言語活動」「酷薄の空」など、やや大仰なタイトルが並ぶが、可能な限り平易な文章で著わされているので、読者は安心して幻想文学の現場に立ち合うことができる。

とりあげられた作家は、泉鏡花・谷崎潤一郎・江戸川乱歩・

坂口安吾の四名。十三編の論文のうち七編を占める鏡花は、『春昼・春昼後刻』の主人公玉脇みさを『宿命の女』と位置づけた『美女殺し』、貝、母の骨、暗喩による展開を分析することで、難解な筋を持つ『山海評判記』を解明した『声の衝迫』など、鏡花文学の復権に中心的な役割を果たしてきた著者の冴えが際立っている。

谷崎では、『春琴抄』の傷害事件を「放恣な性愛がおのずから招いた社会的制裁」と捉えた「露わす性」とくらし隠す性、乱歩では、大正期に発する「南進論」を背景に「怪人二十面相」の社会的意義を明らかにした「虚体の戯れ」、安吾では、チベット学を念頭に置いて『夜長姫と耳男』が書かれたとする「忿怒神のごとく」がおもしろい。

研究的・批評的な興味を堪能させてくれる一書の刊行を祝いたい。

田中勲儀(大学文学部教授)



京都書院
1,000円

旅 安曇野・北信濃 山田興司著 中学校教諭

「同志社の四季」ほか、感動的な写真集を多数出版しておられる、同志社中学校の、山田興司先生が、四十年近くも、信州を愛し、信州へ通いつめた成果として、上梓された。

これは、信州の自然と風物、それに、人情までをもとらえた、珠玉の写真集である。と同時に、所々にそえられた、エッセーがまたよい。信州を愛する、日本人の人人の旅情をかきたてるばかりでなく、若くして郷関を出でた信州人達の郷愁をそそるものがある。

山田先生が、「はじめに」で引用しておられる「信濃の国」は、

信州人なら誰でも口ずさめる歌である。これと「千曲川旅情の歌（小諸なる古城のほとり）」は、故郷をはなれる場合のために必ず覚えておくと、子供の頃から、教えこまれるのである。そのうえ、「まだあげ初めし前髪」の、林檎のもとに見えしとき……（初恋）まで、讀んじておれば完璧な信州人である。山田先生は、これらの、言わば、信州人の心の歌の中に出てくる情景を、信州人以上に信州を理解された先生の眼で、写し撮っておられる。

「四方に聳ゆる」 厳しい山々、里に咲く美しい花々、「薄紅の秋の実」、「しろがねの衾の岡辺」、「月の名にたつ姥捨山」。中山晋平記念館の写真からは、狸ばやしや、カチューシャの歌が聞こえてきそうである。

「日本の屋根」とも言われる信州に興味をもたれる、日本中の人人に、ぜひ一度、手にとって眺めていただきたい写真集である。 佐藤幸夫（大学法学部教授）

ビデオ「新島襄」の制作進む

紀伊國屋書店が創業七十年企画として制作中の映像による人物評伝シリーズ『学問と情熱』第十巻「新島襄」の撮影が佳境に入っている。同書店はこの作品を、新島襄の生涯と業績の映像による決定版にしたいと、熱意を込めて取り組んでいる。新資料を折り込み、今後ポストン・ロケも行うということで、充実した作品に仕上がりそうだ。シリーズの総合監修は紀田順一郎氏。「新島襄」の巻の監修は沖田行司本学文学部教授。制作は株式会社ポルケ。収録時間は約四〇分で価格は二万五千元。三月末発売予定。紀伊國屋書店の店頭で購入できるほか、全国の書店で注文できる。なお同志社大学の学生・校友に対しては、校友会・生協などで特別価格にて販売する予定。

